婦人警官ジーナの日記

by Geena.S

その夜、私は相棒のモリーと車を走らせていた。私たちはクック郡警察殺人課の刑事。今夜は何か事件が起こりそうな気がする。「人々の仕事が終わったとき、私たちの仕事が始まる」これがモットーだ。

モリーはゆっくりと車を走らせていた。ほんの些細な事も見逃すまいとして。当然だろう。パトロールとはそういうものだ。でも、それに気づかない馬鹿がいた。私たちの後ろを走っていたメルセデスがクラクションを鳴らした。モリーは知らん顔でさらにスピードを落とした。

「こら、スピードをあげろ！」

メルセデスの運転手が窓から丸い顔を出して怒鳴った。

「この馬鹿な雌犬めが！」

かわいい馬鹿。モリーはさらにスピードを落とした。ガン！　メルセデスが私たちの車にカマを掘ったのだ。

ちょうど私は助手席でコーヒーを飲んでいた。その衝撃でコーヒーを胸に零してしまった。砂糖やクリームやブルーマウンテンが私の乳房の谷間に滴った。私は舌打ちした。警官の月給からいってブルーマウンテンは決して安くはないのだ。

モリーと私は車を止め、外に出た。メルセデスの運転手も車を降りた。馬鹿がわめいた。
「おい！　どうしてくれるんだ。僕のメルセデスに傷をつけやがったな。僕は弁護士のルー・デューイだ。デューイ法律事務所の跡取りなんだ。貴様ら、訴えてやる」
モリーは無視して言った。
「免許証と車検証を」
「なんだと！」
男は顔を真っ赤にした。
「ふん、たかが雌ポリのくせしやがって。僕は知ってるぞ。てめえら、署長のナニをしゃぶってなんとか昇進しようとしてるくせに。なんなら僕のをしゃぶってみろ。裁判は手加減してやるかもしれないぞ」
私はデューイの腕をつかんだ。
「後ろを向いて」
デューイは拒絶した。
「なんだと、てめえらに命令される覚えはねえ！」
私は彼に平手打ちを食わせた。ぶくぶくと太った愚鈍な七光野郎が怯えた。私は彼を後ろに向かせ、両手を背中に回し、手錠をかけた。それから、彼の脚を大きく開かせた。モリーがにやりと笑った。私のやり口は知っている。七光野郎もそれに気づいたようだった。

「警察の横暴だ。う、訴えて……」
彼がいい終わるより早く、私の膝が彼の股間に叩きつけられた。ひざ頭が見事に彼の睾丸に命中した。ビンゴ！　乳首がぴくんと立った。
七光野郎の膝が落ち、くずおれそうになった。私は素早く彼の背後から手を伸ばし、陰嚢をぎゅっと握りしめた。豚野郎が悲しげな悲鳴をあげた。
「悪徳弁護士さん、警察の横暴とやらをじっくり味わわせてあげる」
私は彼の陰嚢を引っ張って立たせた。モリーが彼女の車の後ろのドアをあけた。私は彼を後部座席に放り込んだ。彼は顔を恐怖と苦痛に引きつらせ、股間を両手で押さえて呻いている。
さあ、いよいよ本番だ。私は期待に胸をわくわくさせた。乳首がさらにぴんと立ち、生殖器が濡れてくるのが感じられた。

モリーの車は人けのない森の中で止まった。
私たちはデューイを車から降ろし、立たせた。そしてもう一度、今度は正面から彼の股間を膝で蹴った。彼は呻き、体を前屈みにした。私は彼の頭髪をつかんでまっすぐに立たせ、それからベルトを外し、ズボンとパンツを足首までずり下げた。
私たちは大声で笑った。なんてこと！　七才の子供だって、こいつのペニスより大きい持ち物をもってるだろう。カクテルに入ったエビの半分くらいの大きさしかない。おまけに・・割礼の

痕があった！
「や……やめてくれ……」
彼は必死に懇願した。私は自分の胸を撫でた。コーヒーがブラウスを汚している。彼は代償を支払わなければならない。
私は彼のペニスを握りしめ、思い切り引っ張った。彼は恐怖に目を見開いていた。
「このバッジが見えないの？」
私は冷やかに言った。
「このバッジはね、何をしてもいいっていう意味なの。大袈裟じゃなくて、本当にそうなの。まだ、あんたらの邪悪な宗教で世界を汚染したければ、私たちに逆らわないほうがいいのよ。わかった？」
デューイは急いで頷いた。私は彼の陰嚢を握り爪を立てた。デューイは絶叫した。私は構わず、深く深く彼の睾丸に爪を食い込ませた。デューイは涙を流し、がくがくと頭を前後左右に振った。
「よしなよ、ジーナ。それ以上やると、こいつ死ぬよ」
モリーがにやにやしながら言った。私は彼の陰嚢から手を離した。彼はがっくりと地面にくずおれた。本当は手で股間を押さえたいのだろうが、両手は後ろ手に手錠をかけられている。うつ伏せになり、涎と涙を流しながら、痙攣するばかりだった。
モリーは屈みこんで、デューイを仰向けにした。

「あらあら、こんなに腫れちゃって。なかはぐちゃぐちゃかもよ」
言うなり、デューイの陰嚢をぎゅっと掴んだ。デューイが絶叫し、大きく腹部を上に突き出した。
「じっとして！　じっとしないと、潰すぞ」
モリーが怒鳴った。デューイはおとなしくなった。
「ち……畜生。雌豚め。俺のペニスを嘗めやがれ……」
デューイがぶつぶつ呟いた。
「なんですって！　この割礼野郎」
言うなりモリーはデューイの顔の上にどっかと跨がり、拳を固めて腫れ上がった睾丸を殴りつけた。デューイの悲鳴は、彼女の股間に塞がれた。
「私はレズビアンなの！　あんたのペニスなんか嘗めないの！」
モリーは何度も何度も睾丸を殴った。デューイの陰嚢は、内出血のためだろうか。彼のちっちゃなペニスとは裏腹にボールのように膨れあがった。
モリーが立ち上がると、デューイは目を恐怖に見開き、口を開け、こまかく痙攣していた。顔面は蒼白だった。私たちは、デューイを立たせ、車のところまで引きずり、トランクを開け、その前に立たせ、トランクの淵に彼の膨れ上がった陰嚢を置いた。
「スピードを上げろって言ったよね。じゃあ、これからドライブしようか」

私はにやにやしながら、トランクのドアに手をかけた。
「や……やめて……ください……」
デューイは惚けたような顔で、かすかに呟いた。
「じゃあ、いくよ」
私は思い切りトランクをしめた。
「ぎゃあああああああああああ！」
恐ろしい絶叫がほとばしり出た。デューイの睾丸はトランクに挟まれて完全に潰れ、陰嚢は破裂したに違いない。私はデューイの手から手錠を外し、モリーを促して車に乗り込んだ。モリーが車を走らせた。
振り返ると、すでにデューイの体はモリーの車から離れていた。少し向こうに、陰嚢を引きちぎられ、血を噴き出している股間を剥き出しにした哀れなデューイの太った体が転がっていた。

警察署まで車を走らせていると、無線が入ってきた。
「こちらモリー・ホワイト。いまから帰ります」
モリーが応えた。
――了解。ところでモリー……。
メルという警官だった。モリーをしつこく誘っている色男だ。

――今夜こそ、付き合ってくれるか。君のことを思うと、おったっちゃってどうしようもないんだ。頼むよ。願いをかなえてくれ。
モリーはにやりと笑った。
「そんなにおったっちゃってるの？」
――そうだ。君でなきゃ、元に戻らないんだ。
「永久に立たなくしてあげようか？」
私が口を挟んだ。
――なんだ、モリー、誰かほかにいるのか？
「ええ。私とジーナ。それに、ルー・デューイ弁護士。ただし弁護士は金玉だけ」
――金玉だけ？
「そう。あんたもそいつと同じようにしてほしいのなら、つきあってあげるけど、どう？」
メルは沈黙した。私たちは笑い転げながら街へと向かった。